

1、はじめに

本論文は、当時中学部1年生であった生徒Aを対象とした金銭学習の実践記録である。Aは特別支援学級から特別支援学校に入学してきた生徒であり、当初は環境変化に伴う不安が見られたものの、次第に新しい生活に慣れ、学習に意欲的に取り組むようになった。

特別支援学級でプリントを使った学習に取り組んできた積み重ねがあり、4桁までの繰り上がり、繰り下がりのある筆算ができた。【図1】また、かけ算の筆算、わり算の筆算もできた。計算の手順をしっかりと覚えていて、時間をかければしっかりプリントを最後までやることができた。

【図1】

しかし、保護者との面談から、公共交通機関の利用や自ら買い物をするといった将来の自立に向けたニーズがある一方、お小遣いを使ってお菓子を買うなどの生活経験が不足しているという現状が明らかになった。この背景には、Aの金銭理解について、保護者からご心配の声があり、金銭の取り扱いに関する十分な経験を積む機会が限定的であるという課題があった。そこで、将来の自立へ向けて、本実践では金銭学習を通して、生徒Aが自らの力でおやつを選んで購入するという目標を掲げた。本論文は、この目標達成に向けた取り組みのプロセスと、その成果を考察するものである。

2、生徒Aの実態

面談は、夏休み中にあつたので、その前までは、プリントを使用した学習を行っていた。「1、はじめに」でも述べたように、筆算は計算手順を理解し、正しい答えを導き出すことができた。

しかし、その高い計算力とは対照的に、お金の計算のプリント学習【図2】では、金種のイラストを見て金額を答えることに難しさが見られた。例えば、100円玉が3枚、10円玉が4枚といった場合、各金種を個別に認識することはできても、それらを組み合わせて全体像として捉えることが難しかった。そこで、100円玉が3枚だから300円、10円玉が4枚だから40円と各金額を書き出し、筆算で合計を求めるといった方法を繰り返した。この結果、6月中旬には、5円玉1枚と1円玉4枚で9円といった比較的単純な組み合わせは即座に答えられるようになった。しかし、複数の金種で構成される合計金額を、イラストから直感的に判断することは難しいままであった。



【図2】

3、実践の概要

(1)実践の目的

本実践は、金銭に関する学習を通じて、生徒Aが「自分にはできる。」という確かな自信を育み、将来を豊かにするための基盤を築くことを目的とする。具体的には、生徒Aが有する高い計算能力を、単なる机上の知識に留めず、実物教材や多様な視覚的ヒントカードを用いることで、貨幣の持つ本質的な価値と、その組み合わせのルールを体感的に習得させる。

さらに、本人の認知プロセスに着目し、単なる合計金額の算出に留まらず、複数の商品購入や支払い方法の選択といった複雑な課題を設定することで、状況に応じて自身の金銭を主体的に管理・運用する能力を養う。これらの成功体験の積み重ねが、将来的に一人で公共交通機関を利用し、買い物をするとした生活自立に向けた確かな自信と意欲に繋がり、豊かな社会生活を送るための基盤となることを目指す。

(2)実践の期間

令和6年9月～令和7年3月

(3)実践の手順

[段階1]:金銭の認識と組み合わせ学習(9月)

[段階2]:カタログを用いた学習と金額の大小の理解(10月~12月)

[段階3]:多様な支払い方法と判断力の育成(1月~3月)

[段階4]:実生活への応用と学習の総括(3月)

4.実践の具体

(1) [段階1]金銭の認識と組み合わせ学習(9月)

はじめに、【図3】のシートを用いて、初めにどの硬貨が何円を表しているかを確認した。その後、上の見本はなして、下の空欄に正しく硬貨を置くことが出来るかを確認したところ、間違うことなく置くことができた。

次に、【図4】のような、お菓子のイラストと、その値段(30円、75円など)が表記してあるカードに、硬貨を置く学習を行った。当初、30円であれば10円を3つ、70円であれば10円を7つと、10円のみを使っていた。そこで、「正解!他にもお金の置き方あるの分かる?」などとやりとりをしながら、50円玉との組み合わせがあることを確認した。しかし、何度かやっても、10円のみを使うという状況は変わらず、自ら50円玉と組み合わせることはなかった。

そこで、【図5】のようにカードに置く硬貨の数だけ○を表記し、それを使うようにした。○があると、それをヒントに考えて置く様子が見られた。50円玉を使える状況でも10円玉のみを使うことと同様に、500円玉を使える状況でも100円玉のみを使用するという状況があったので、【図6】【図7】のようなカードを用いた。また、560円のときに、500円を置くことができたが、60円は迷うということがあった。そのような際は、ヒントカード【図8】を見て、60円の組み合わせを確認すると置くことができた。数日【図5】【図6】のような○が表記してあるカードを用いて学習を繰り返した後に、【図4】【図7】のような○のないカードを用いると、80円、90円などの50円玉を使える場合や、720円、860円などの500円玉を使える場面では、50円玉や500円玉を使用するようになった。

【図4】のようなカードを用いた。また、560円のときに、500円を置くことができたが、60円は迷うということがあった。そのような際は、ヒントカード【図8】を見て、60円の組み合わせを確認すると置くことができた。数日【図5】【図6】のような○が表記してあるカードを用いて学習を繰り返した後に、【図4】【図7】のような○のないカードを用いると、80円、90円などの50円玉を使える場合や、720円、860円などの500円玉を使える場面では、50円玉や500円玉を使用するようになった。

【図4】のようなカードを用いた。また、560円のときに、500円を置くことができたが、60円は迷うということがあった。そのような際は、ヒントカード【図8】を見て、60円の組み合わせを確認すると置くことができた。数日【図5】【図6】のような○が表記してあるカードを用いて学習を繰り返した後に、【図4】【図7】のような○のないカードを用いると、80円、90円などの50円玉を使える場合や、720円、860円などの500円玉を使える場面では、50円玉や500円玉を使用するようになった。

示された金額に対して必要な硬貨を選択して出すことができるようになったので、次の流れで学習を行った。①ランダムに複数のカードの中から欲しいものを3つ選択させる。②その合計金額を電卓で計算させる。③計算した値段を「何円ですか?」と教師が確認し、「〇〇円です。」と言わせる。④「それでは、〇〇円下さい。」と硬貨を出すように促す。

カード1枚では迷うことなく提示された金額だけ出すことができるようになっており、また

1円	5円	10円	50円	100円	500円
1円	5円	10円	50円	100円	500円

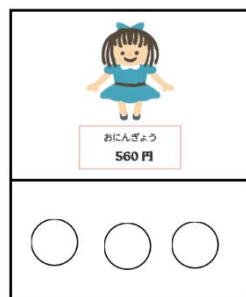
【図3】



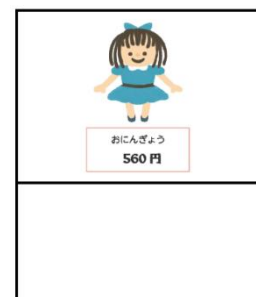
【図4】



【図5】



【図6】



【図7】

<10円~100円>

10円				
20円				
30円				
40円				
50円				
60円				
70円				
80円				
90円				
100円				

【図8】

<1円~10円>

1円				
2円				
3円				
4円				
5円				
6円				
7円				
8円				
9円				
10円				

【図9】

<10円~100円>

10円				
20円				
30円				
40円				
50円				
60円				
70円				
80円				
90円				
100円				

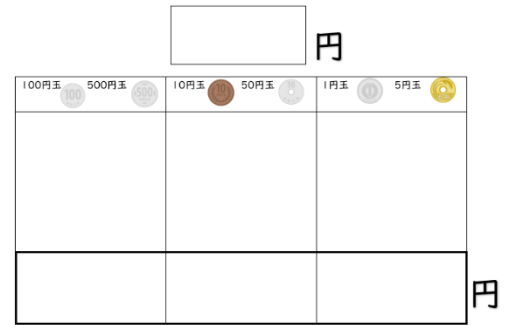
【図10】

<50円~500円>

50円				
100円				
150円				
200円				
250円				
300円				
350円				
400円				
450円				
500円				

【図11】

実際に買い物をする時に電卓を用いることを想定し、複数の商品を選び、合計金額を求めるといった状況を作った。しかし、電卓に示された数字を読んで適切な硬貨を選び出すという状況の場合どのように出せばいいのか分からないようで、出すことができなかった。【図8～11】のヒントカードを使いながら、一桁ずつ確認し、「200円は?」「40円は?」「3円は?」と出していった。全て硬貨が並べられた後に、「全部で何円?」と聞くと、それも「分からない。」ということだった。考えることが多すぎるからか、どこかで思考停止になってしまっているようだった。



【図12】

そこで、位取りのヒントカード【図12】を作成し、それを用いて、どの桁にどの硬貨が当てはまるかを確認していった。数日繰り返し取り組むことで、理解が深まり、複数のカードの合計値を電卓で計算し、金額通りのお金を並べることができるようになってきた。

(2)[段階2]カタログを使ったより大きな金額の学習(10、11月)

電卓を使い、合計金額を読むという活動を継続して繰り返してきた結果、千の位までの数を正しく読めるようになってきた。また、一万円札1枚と千円札10枚が等しい値段であることを伝えるために、電卓で千を10回足し一万になることを確かめたところ、一度で理解することができた。



【写真1】

実践的な買い物の練習として、おもちゃのカタログ【写真1】を使って千円以上の買い物を想定した学習を行った。

次のような流れで学習を行った。①カタログの中から買いたいおもちゃを2つ選ぶ。②合計金額を電卓で計算する。③金額分の貨幣を並べる(支払う)。④支払った金額を用紙【図13】に記入し、次の買い物を行う。

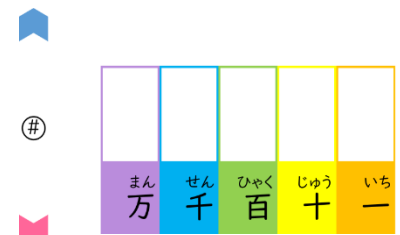
④の金額を記入する際、千の位の数や百の位の数を書くときに「1」の後に「0」を書くことが多かった。(例: 3125→31025、1320→10320)

月 日 ()

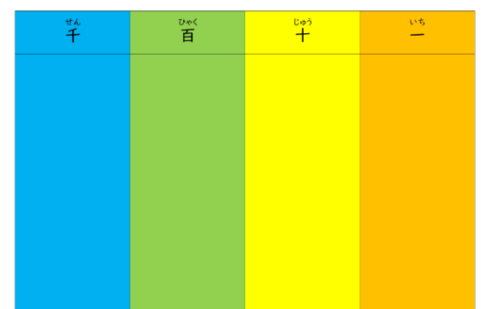
①	
②	
③	
④	
⑤	

【図13】

何度正しい表記の仕方を伝えても、正しく書くことが難しく、位取りの理解が曖昧な実態があることが分かってきた。そこで、各位に数字を表示することのできる位取り表のPowerPoint【図14】を利用し、位ごとに数字を表示してからそれを書き写すようにしたり、お金を出すときには、位取り表の上に置いたり【図15】することを繰り返した。すると、10月の末頃には、正しくお金を出し、そして表記できるようになってきた。以後、11月中も継続して同じ内容の学習を行った。



【図14】



【図15】

(3)[段階2]金額の大小の学習①「買える・買えないシート」(12月)

(2)のようなカタログを用いた学習の中で、「このおもちゃと、このおもちゃどっちが高い?」「〇〇円持っていたとしたら、買える?買えない?」などのやり取りをしていると、自信をもって答えられることがほぼなく、また答えたとしても不正確なことが多かった。そんなやりとりを繰り返し、金額の大小の理解が曖昧であるということが分かってきた。そこで、「〇〇円のおこづかいて買えるか買えないか」(主に100円前後の商品)という学習を12月2日から開始した。

学習の進め方としては「買える・買えないシート」【図16】と買い物カード【図17】を用いて次の流れで行った。①お小遣

いを10円～100円程度、日によってランダムに渡す(30円の日もあれば、90円の日もあるというように)。その際、シートの黄緑色の部分にお金を置く。②カードをランダムに引き買えるか買えないかを判断し、買える場合は黄色を部分、買えない場合は青い部分に置く。③以後、カードがなくなるまで繰り返す。

1週間ほどで、100円以内の物の判断は正確になった。そこで、200円以内の物、300円以内のもの徐々に価格を上げていった。しかし、価格を上げていき、金額の大小の判断ができるようになってきたと思っていたら、またふとしたやり取りの中でそうとは言えないということが分かってきた。それは、例えば「389円と410円だったらどちらが高いの?」と聞いた際のことであった。

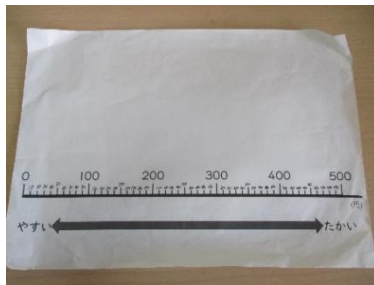
お小遣いを固定して(例えば、「今日は250円ね。」など)提示された品物(例えば200円のお菓子)を、買えるのか、買えないのかという判断を尋ねると、正しく答えることができる。しかし、「この商品の値段は389円。今、手持ちのお金が410円ある。商品と手持ちのお金、どちらの値段が高いの?」と聞くと、「389円」と本人は答えた。「何で?」と聞いても理由は答えられず、困っている。という状況になった。

本人は一体数字のどこを見て判断していたのだろうか。お小遣いを固定し、カードを見せ、「これは買える。」「これは買えない。」と判断は大分できていたので、円の大小についての量的な感覚が身に付いたと思っていたが、そうとも言えないことが分かった。

硬貨と数値だけを見ていても、事態は変わらないと考えた。そこで、金額の大小を判断するために、数直線を用いることにした。

(4)[段階2] 金額の大小の学習②「数直線」(12月)

12月19日より、2枚の品物カードを引き、どちらの値段が高いのかという判断や、渡されたお小遣いで品物を買えるか買えないかを判断する際に数直線を使って、カードに書かれている金額(数)が、数直線上のどの位置にあるのかを確かめるようにした。【写真2・



【写真2】

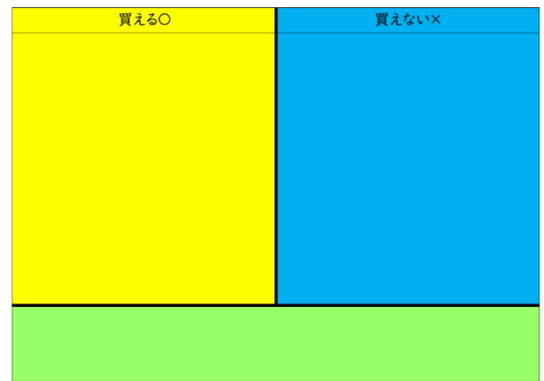
3]すると、判断となる根拠を意識することができるようになったためか、以前より、自信を持って答える場面が多くなってきた。

どちらが高いのか、買えるのか・買えないのかという2つの学習と並行して、家庭の中でお小遣いをもらって買い物をする場面を想定し、100円玉しか持っていないときに、提示された金額に対し、100円玉何枚で払うのか(例えば、360円の商品だったら400円(100円玉4枚))という学習も行った。困ったときには、ヒントカード【図18】を見ながら払う経験を重ねた。

(5)[段階3] 10円と100円の組み合わせで支払う(1月)

1月後半には、繰り返し数直線を使った、学習を重ねたことで、高いか安いかの判断がより正確になり、自分の渡されたお小遣いを基準としながら考えられるようになった。

示された金額の硬貨をぴったり出すことができるようになってきたので、1月末頃～2月に入るあたりで、引いたカードの



【図16】

72円	82円	65円	52円
92円	67円	85円	77円
58円	16円	28円	15円
98円	38円	7円	9円

【図17】



【写真3】

額面	100円玉	10円玉	枚数
10円, 20円, 30円, 40円, 50円	●		1まい
110円, 120円, 130円, 140円, 150円	●●		2まい
160円, 170円, 180円, 190円, 200円	●●●		3まい
210円, 220円, 230円, 240円, 250円	●●●●		4まい
260円, 270円, 280円, 290円, 300円	●●●●●		5まい
310円, 320円, 330円, 340円, 350円	●●●●●●		6まい
360円, 370円, 380円, 390円, 400円	●●●●●●●		7まい
410円, 420円, 430円, 440円, 450円	●●●●●●●●		8まい
460円, 470円, 480円, 490円, 500円	●●●●●●●●●		9まい
510円, 520円, 530円, 540円, 550円	●●●●●●●●●●		10まい
560円, 570円, 580円, 590円, 600円	●●●●●●●●●●●		
610円, 620円, 630円, 640円, 650円	●●●●●●●●●●●●		
660円, 670円, 680円, 690円, 700円	●●●●●●●●●●●●●		
710円, 720円, 730円, 740円, 750円	●●●●●●●●●●●●●●		
760円, 770円, 780円, 790円, 800円	●●●●●●●●●●●●●●●		
810円, 820円, 830円, 840円, 850円	●●●●●●●●●●●●●●●●		
860円, 870円, 880円, 890円, 900円	●●●●●●●●●●●●●●●●●		
910円, 920円, 930円, 940円, 950円	●●●●●●●●●●●●●●●●●●		
960円, 970円, 980円, 990円, 1000円	●●●●●●●●●●●●●●●●●●●		

【図18】

値段に対して、①100円玉何枚で支払うか。②100円玉と10円玉をどのように組み合わせで払うかという学習を始めた。

100円玉何枚で払うかの時と同じように、困ったときにはヒントカード【図19】を見て払うことを繰り返したところ、ヒントカードを見なくても、正しく判断して払えることが増えた。また、この学習の際にも数直線も用いたことで、連続した数の位置関係として捉えられるようになってきたようである。

ヒントカードをどこまで作れば、ヒントカード無しでも正しく出せるようになるかと思っていたが、100円2枚と10円の組み合わせは2、3日学習すると正しく出すことができた。さら

に、ヒントカード無しで、100円3枚と10円の組み合わせで出せるかやってみたところ、全く困ることなく出すことができた。支払い方のルール(値段に対して100円玉、10円玉をどう組み合わせればよいかということ)に気が付いたようだった。

(6)[段階3]より現実的な想定 of 支払い(2、3月)

「ぴったり払う」「100円玉何枚かで払う」「10円玉何枚かで払う」「100円玉と10円玉を組み合わせで払う」ということができるようになった。そこで、財布の中身がいつも決まった額が入っているわけではないことを想定して、持っているお金を見て、「ぴったりか、できるだけ近い値段か、それとも買うことができないか」を判断して支払うという学習を開始した。

次の手順で学習を行った。①お小遣いを渡す。(100円~300円の間程度の金額)②そのお小遣いが何円かを判断し、ホワイトボードに書く。③トランプのババ抜きのように、教師から買い物カードを引き、出たカードの支払いをする。

まず、①の段階で、何円か分からないということもあった。その際は、位取りシートにお金を置くようにすると判断することができた。【写真4】

この学習をはじめたばかりの頃の支払いのルールは2つで、①できればぴったり払う。②できるだけ近い数で払う。というものだった。(考えることが多くなりすぎないように、買えない値段のものは選択肢に入れなかった。)ルールは、ホワイトボードに書き、常に確認できるようにした。【写真5】

日によって、渡す金額を変えた。例えば、ある日は各硬貨1枚ずつにすることで、あまりなじみのない50円玉も使う必要がある状況を作った。また、あるときには、同じくあまりなじみのない5円玉を使う必要がある状況を作った。その際、本人の得意の方略としての10円刻みで払うということができないので、「買えない!」と言うこともあった。そんなときには、「いや、

値段	100円玉と10円玉の組み合わせ	支払い方
1円, 2円, 3円, 4円, 5円 6円, 7円, 8円, 9円, 10円	●	1まい
11円, 12円, 13円, 14円, 15円 16円, 17円, 18円, 19円, 20円	●●	2まい
21円, 22円, 23円, 24円, 25円 26円, 27円, 28円, 29円, 30円	●●●	3まい
31円, 32円, 33円, 34円, 35円 36円, 37円, 38円, 39円, 40円	●●●●	4まい
41円, 42円, 43円, 44円, 45円 46円, 47円, 48円, 49円, 50円	●●●●●	5まい
51円, 52円, 53円, 54円, 55円 56円, 57円, 58円, 59円, 60円	●●●●●●	6まい
61円, 62円, 63円, 64円, 65円 66円, 67円, 68円, 69円, 70円	●●●●●●●	7まい
71円, 72円, 73円, 74円, 75円 76円, 77円, 78円, 79円, 80円	●●●●●●●●	8まい
81円, 82円, 83円, 84円, 85円 86円, 87円, 88円, 89円, 90円	●●●●●●●●●	9まい
91円, 92円, 93円, 94円, 95円 96円, 97円, 98円, 99円, 100円	●●●●●●●●●●	10まい

値段	100円玉と100円玉を組み合わせで払う	支払い方
101円, 102円, 103円, 104円, 105円 106円, 107円, 108円, 109円, 110円	●●	110円
111円, 112円, 113円, 114円, 115円 116円, 117円, 118円, 119円, 120円	●●●	120円
121円, 122円, 123円, 124円, 125円 126円, 127円, 128円, 129円, 130円	●●●●	130円
131円, 132円, 133円, 134円, 135円 136円, 137円, 138円, 139円, 140円	●●●●●	140円
141円, 142円, 143円, 144円, 145円 146円, 147円, 148円, 149円, 150円	●●●●●●	150円
151円, 152円, 153円, 154円, 155円 156円, 157円, 158円, 159円, 160円	●●●●●●●	160円
161円, 162円, 163円, 164円, 165円 166円, 167円, 168円, 169円, 170円	●●●●●●●●	170円
171円, 172円, 173円, 174円, 175円 176円, 177円, 178円, 179円, 180円	●●●●●●●●●	180円
181円, 182円, 183円, 184円, 185円 186円, 187円, 188円, 189円, 190円	●●●●●●●●●●	190円
191円, 192円, 193円, 194円, 195円 196円, 197円, 198円, 199円, 200円	●●●●●●●●●●●	200円

値段	100円玉と100円玉を組み合わせで払う	支払い方
201円, 202円, 203円, 204円, 205円 206円, 207円, 208円, 209円, 210円	●●●	210円
211円, 212円, 213円, 214円, 215円 216円, 217円, 218円, 219円, 220円	●●●●	220円
221円, 222円, 223円, 224円, 225円 226円, 227円, 228円, 229円, 230円	●●●●●	230円
231円, 232円, 233円, 234円, 235円 236円, 237円, 238円, 239円, 240円	●●●●●●	240円
241円, 242円, 243円, 244円, 245円 246円, 247円, 248円, 249円, 250円	●●●●●●●	250円
251円, 252円, 253円, 254円, 255円 256円, 257円, 258円, 259円, 260円	●●●●●●●●	260円
261円, 262円, 263円, 264円, 265円 266円, 267円, 268円, 269円, 270円	●●●●●●●●●	270円
271円, 272円, 273円, 274円, 275円 276円, 277円, 278円, 279円, 280円	●●●●●●●●●●	280円
281円, 282円, 283円, 284円, 285円 286円, 287円, 288円, 289円, 290円	●●●●●●●●●●●	290円
291円, 292円, 293円, 294円, 295円 296円, 297円, 298円, 299円, 300円	●●●●●●●●●●●●	300円

72円	82円	65円	52円
92円	67円	85円	77円
58円	16円	28円	15円
98円	38円	7円	9円

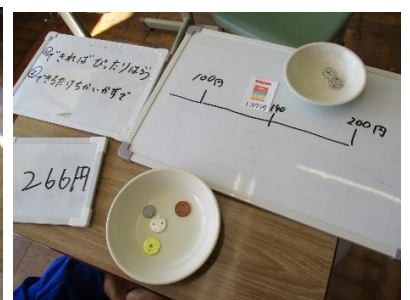
106円	113円	128円	137円
144円	88円	156円	62円
117円	16円	194円	166円
173円	38円	187円	196円

205円	217円	226円	137円
244円	188円	256円	162円
217円	16円	294円	266円
273円	138円	287円	196円

【図19:ヒントカードと使用したカード(上下で対応)】



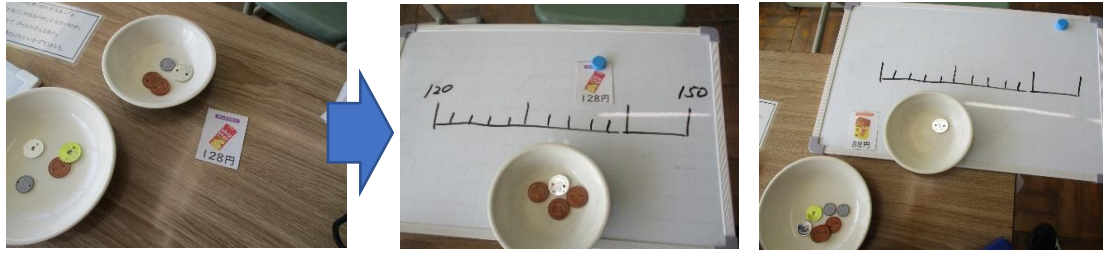
【写真4】



【写真5】

買えますよ。」と言うともう一度考え直したり、それでも「難しい。」と言ったりして考えきれないような場合は、数直線をヒントに示したりして段々と払えるようになってきた。

困ったときには、数直線を用いた。時に、数字の書いていないメモリを見せただけでもひらめくことすらあった。(頭の中に数直線を描きながら考えているということだろうか。)【写真6】



【写真6】

本人は、ルールが文字で示されている(言語化されている)と分かりやすいようだったので、『かいものときにかんがえること』カード【図20】を作り、これを机の上に置いて常に見えるようにしながら学習をすることとした。時に、多めに払った際「それも買えるね。でも、②でいけるよ。」などと伝えるようにした。



『かいものときにかんがえること』

- ①もっているおかねで、かえるのか、かえないのか。
- ②もっているおかねで、ぴったりはらえるか。
- ③かうねだんに、できるだけちかいかずではらう。

【図20】

以下、具体的な事例8つを表で示す。

	実施日	状況設定・取り組みの様子・考察
事例1	2/17	<p>【状況設定】</p> <p>100円玉1枚、50円玉1枚、10円玉1枚、5円玉1枚の計165円持っている場面。</p> <p>【取り組みの様子】</p> <p>①15円の商品:はじめに50円玉を出した。100円玉何枚で払うかという学習から考えると合理的な判断である。しかし、今回は「できるだけ近い値段(できる場合はぴったり)で」払う必要がある。「おー!すごい。払えるね。見て見て、もしかしたらぴったりも出せるんじゃない?」と伝え、10円玉1枚、5円玉1枚の15円を出すことができた。</p> <p>②65円の商品:はじめに100円を出した。学習したことを活かして大変立派である。しかし、①の時と同じように「ぴったりも出せるんじゃない?」と伝えても自分では出せなかったため、一緒に50円玉1枚、10円玉1枚、5円玉1枚合わせて65円として払えることを確認した。</p> <p>【考察】</p> <p>「ぴったり払う」というルールの場合は、正しく払える。「近い値段で払う」ルールするときにも正しく払える。しかし、いずれかを判断して払うということが初めてだったので、分からなかったようだ。「ぴったり」か「近い値段で」か、どう払えばいいのか悩んでいる様子が見られ、①の15円の商品で「ぴったりも出せるんじゃない?」と伝えたときには「引き算です!」と頭をフル回転していて悩んでいるであろう回答があった。</p> <p>ぴったり払う、近い値段で払うという個別のルールで正しく払うことができるようになったとしても、そのルールが自然に組み合わせるわけではなく、学習したルールを組み合わせる場面を設定することの必要性を感じた。</p> <p>《事例1》を受けて、「できるだけ近い値段(できる場合はぴったり)で」払うことを学習し始めたばかりで、100円玉、50円玉、10円玉、5円玉と硬貨の選択肢が多いと混乱することが分かった。そこで、まずは100円玉と10円玉の組み合わせ(100円玉2枚、10円玉5枚などのよう)にして、近い値段がぴったりかを判断して支払う経験を重ねることにした。すると、数回やってみると、正しく支払えるようになった。そこで、50円玉を増やしたり、5円玉を増やしたり、段階的に選択肢を増やしていった。以下の《事例2》はそのような選択肢が少ない学習の事例である。</p>

事例2	2/19	<p>【状況設定】</p> <p>100円玉1枚、50円玉1枚、10円玉2枚の計170円持っているときに、82円の商品を買う場面。</p> <p>【取り組みの様子】</p> <p>迷わず100円玉1枚で支払うことができた。【写真7】</p>	 <p style="text-align: center;">【写真7】</p>
事例3	2/21	<p>【状況設定】</p> <p>100円玉2枚、50円玉1枚、10円玉5枚、5円玉1枚の計305円を持っている場面。</p> <p>【取り組みの様子】</p> <p>①50円の商品:迷うことなく50円玉1枚を出せた。</p> <p>②15円の商品:はじめに、10円玉2枚で20円を出した。「オッケー。買えるね。ぴったりも出せるよ?」と伝え、10円玉1枚、5円玉1枚の15円を出すことが出来た。</p> <p>③244円、273円、294円、162円の商品:今回は10円玉が5枚もあるので、それらを駆使し、得意の10円刻みの方法で迷うことなく調整して少し多めに支払うことができた。</p> <p>【考察】</p> <p>作成した商品カードの値段設定が、5円玉も使えるような設定になっていなかった。お小遣いの金額設定と、カードの設定をよく考える必要があると感じた。</p>	
事例4	2/26	<p>【状況設定】</p> <p>100円玉2枚、50円玉1枚、10円玉3枚、5円玉1枚、1円玉1枚の計286円持っている場面。</p> <p>【取り組みの様子】</p> <p>①294円の商品:自分で「買えない。」と判断し伝えることができた。</p> <p>②137円の商品:はじめに、100円玉1枚と10円玉3枚の計130円を出す。「これだと足りないね。でも、買える分だけ持っているよ。」と伝え、考え直し100円玉1枚と50円玉1枚の計150円を出すことができた。</p> <p>③138円の商品:迷わずに100円玉1枚と50円玉1枚の計150円を出すことができた。</p> <p>④188円の商品:はじめに、100円玉1枚、50円玉1枚、10円玉3枚の計180円を出す。「足りないね。でも、買える分だけ持っているよ。」と伝える。どう出すか困っていたので、数直線を書き、商品のカードを置いた上で、200円の所を指差し「持っているよね?」と聞くと、100円玉2枚、計200円を出すことができた。</p>	
事例5	3/3	<p>【状況設定】</p> <p>100円玉2枚、50円玉1枚、10円玉2枚、5円玉1枚、1円玉2枚の計277円持っている場面。</p> <p>【取り組みの様子】</p> <p>①80円の商品:100円玉1枚を出せた。</p> <p>②217円の商品:100円玉2枚、10円玉を1枚、5円玉を1枚、1円玉を2枚の計217円ぴったり出せた。</p> <p>③273円の商品:100円玉2枚、50円玉1枚、10円玉2枚の計270円を出して、「足りない。」と言って困ってしまった。教師が数直線を書き、「品物は何円?ここだね。今何円持っているの?277円はここだね。」などとやりとりをしながらカードや矢印を置いた。それでも困った顔をしていたので、教師が「こういうときは、5円を使うといいんだよ。」と伝え、青いマグネットを、商品のカードと矢印の間の275円の所に貼った。【写真8】</p> <p>【考察】</p> <p>②のように、ぴったりと支払う際の5円玉の使い方は納得し、組み合わせで使うことができた。一方、③の「ぴったりではないが、一番近い値段にするための5円玉」という使い方は、まだ本人にとって納得できていないことだったのだろう。そのため、支払うことが出来なかったと推察される。③以後、256円の商品や137円の商品に対してもどのように払えばいいか迷ってしまった。一度支払い方に疑問をもってしまったことから、考える際の選択肢が増え、混乱してしまっただろう。「できるだけ近い値段で払う」ということが、いかに難しいことかを象徴する事例であった。</p>	 <p style="text-align: center;">【写真8】</p>

事例6	3/10	<p>【状況設定】</p> <p>100円玉1枚、50円玉1枚、10円玉3枚、5円玉1枚、1円玉3枚の計188円を持っている場面。</p> <p>【取り組みの様子】</p> <p>88円の商品：今まで50円玉を組み合わせるといことが不正確であったが、自ら50円玉1枚、10円玉3枚、5円玉1枚、1円玉3枚の計88円を払うことができた。</p>
事例7	3/10	<p>【状況設定】</p> <p>100円玉2枚、50円玉1枚、10円玉1枚、5円玉1枚、1円玉1枚の計266円を持っている場面。</p> <p>【取り組みの様子】</p> <p>217円の商品：《事例6》で50円玉を使ったこともあってか、今までであれば、100円玉2枚、10円玉1枚、5円玉1枚、1円玉1枚の計216円を出して、「足りない…。」と言って、困ってしまいそうな状況であったが、自ら判断し、100円玉2枚、50円玉1枚の計250円を見事に払うことができた。【写真9】</p>
事例8	3/11	<p>【状況設定】</p> <p>100円玉1枚、50円玉1枚、10円玉2枚、5円玉1枚、1円玉2枚の計177円を持っている場面。</p> <p>【取り組みの様子】</p> <p>①128円の商品：100円玉1枚、10円玉2枚、5円玉1枚の計125円を出したが、足りないと自分で気が付き、100円玉1枚、50円玉1枚の計150円を出すことができた。【写真10】</p> <p>②173円の商品：今までであれば、100円玉1枚、50円玉1枚、10円玉2枚、1円玉2枚の計172円を出しそうな状況であったが、100円玉1枚、50円玉1枚、10円玉2枚、5円玉1枚の計175円を出すことができた。【写真11】</p>



【写真9】



【写真10】



【写真11】

「ぴったりか、できるだけ近い値段か、それとも買うことができないか」を判断して支払うという学習を、2月中旬より開始し、迷うことなく正しい判断ができるようになってきた。この学習において、教師が本人の支払う様子をよく見て、どんな支払い方の時に迷うことがあるかを見取ることが大切だと考える。その見取りを元に商品とお小遣いの金額の設定をいかにするかが正しい判断ができるようになるための鍵である。「ピンチはチャンス」という言葉があるが、まさにその通りで、ピンチ(迷っていること)が、チャンス(できるようにするために何が必要かのヒントが示されている)ということなのだ実感した。

(7)[段階4]スーパーでの買い物(3月)

これまでの学習の実践編ということで、3月14日に、300円(100円玉2枚、50円玉1枚、10円玉4枚、5円玉1枚、1円玉5枚)を持って近くのスーパーへ行ってきた。買い物の趣旨は、「お財布と相談しながら、ほしいおやつを選んで買ってくる。」ということ。買う際は、電卓を使いながら、「どのお菓子食べる？」などと聞きつつ、かごに入れた。

偶然、選んだ2つのお菓子の合計金額がぴったり300円であった。その場で判断して支払えるかどうかを見取りたかったが、見取ることはできなかった。

しかし、実際にスーパーへ行き、自分で買い物ができた経験は自信につながったようである。【写真12】



【写真12】

(8)[段階4]値段を上げて、状況に応じた支払い方の学習(3月)

スーパーでの買い物学習の後も同じように学習を重ねていった。回数を重ねるごとに、一時少し多めに出すということが身に付きすぎて薄れていた「ぴったり払えるときには、ぴったり」という意識がついてきた。(少し多めに出す方が判断として

は楽なため、時折「ぴったりも出せるよ?」と言うこともあったが。)

300円程度のお小遣いの買い物は自信を持てるようになったため、3/17より500円玉を加えてより高額な買い物の学習を行った。【写真13・14】

神経衰弱のようにカードを並べ、電卓で計算して支払うという、より実際の買い物に近い学習内容とした。【写真15】

電卓を使い、複数の商品の値段を足す。そして、自分のお小遣いの中から支払うという流れの中で、正しく判断し、自信をもって取り組む様子が印象的であった。

ぴったり出せない場合に、「できるだけ近い値段」が手持ちのお金では何円かを考える際に迷うこともあった。その際は、数直線を使用した。【写真16】本人にとって、数直線を繰り返し学習の中で使っていったことにより、一番わかりやすいツールになっていったということだろう。



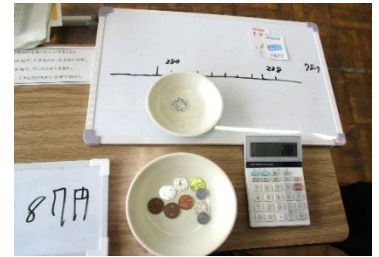
【写真13】



【写真14】



【写真15】



【写真16】

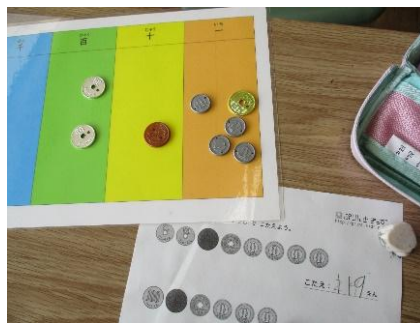
(9)[段階4]学習の成果とプリント

今までの金銭に関する学習の成果が、プリント学習にも反映されるか【写真18】のような学習プリントを行い確認した。

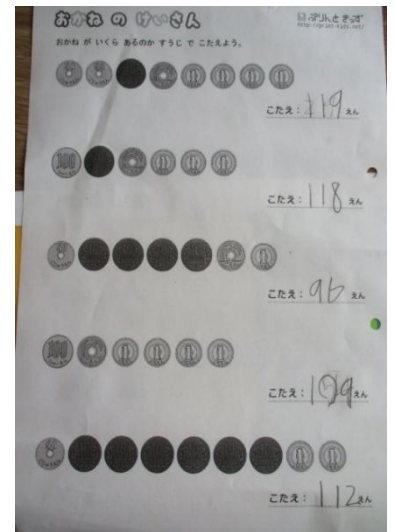
結果は、絵を見て何円かの判断を一人でするという事は難しかった。位取り表にお金を置けば判断することが出来た。【写真17】

求められている状況が異なれば、金銭に関する内容であっても判断ができたり、できなかったりするのとは当然なことだということだろう。

金銭に関する学習と一言で言っても、内容や状況は多岐に渡る。その子に合わせて、その子の今の生活が充実するように学習内容を考えることが大切なことだと思う。たとえこのプリント【写真18】が一人でできなくても、財布と相談して、ほしい物を買うことはできた。全ては、状況と学習の積み重ね次第ということだろう。



【写真17】



【写真18】

5. おわりに

本実践は、生徒Aの「計算はできるが、お金の並んだイラストを見て合計金額を記述することが難しい」という実態に対し、金銭概念を単なる机上の知識から「実生活」へと橋渡しすることを試みた。この取り組みは、当初保護者からAの金銭理解に関するご心配の声があり、金銭の取り扱い経験が限定的であったという実態と課題意識から始まった。

今回の実践は、人の「わかる」「できる」が単純な足し算のプロセスではないことを痛感させるものであった。具体的には、

A(ぴったりのお金を出せる)+B(大体の値段を出せる)=C(ぴったりか、大体かを判断して出せる)

という単純な足し算ではないということだ。何と何が分かれば、新しいことが分かるようになるか、できるようになるかと考えることは必要なことだろう。しかし、単純に積み木を重ねていくように人は理解するわけではないということだ。

では、何が必要か。それは、

$$(A+B) \times \alpha = C$$

となるような「 α 」が必要となる。

この「α」とは、本人の「納得」や「腑に落ちる」という主観的な経験に他ならない。この経験は、ただ闇雲に経験を重ねるだけでは生まれない。例えば、あまり使っていなかった50円玉や5円玉を使う場面で悩み、数直線を見て、考え、そして実際にやってみるという試行錯誤のプロセスを繰り返す中で初めて腑に落ちたのだ。

本実践で用いた位取り表や数直線、ヒントカードは、まさにこの「α」を生み出すための個別最適化された支援ツールであった。これらのツールが、生徒Aが「分かる」という認知の積み木を自らの力で組み替えるためのヒントとなり、複雑な課題を自立的に解決する「判断力」の獲得へと繋がった。

この実践が明らかにしたのは、単に金銭を扱うスキルを習得したという成果にとどまらない。特別支援教育において、本当に重要なのは、単なるスキル指導を超え、生徒の内面的な「分かる」という感覚、つまり「腑に落ちる」経験(すなわち「α」)を見出すことである。そして、そのための個別最適な支援を工夫していくことこそが、生徒の人生を豊かにする確かな基盤を築く上で最も重要であると、改めて強く実感した。

※本論文は、保護者の同意を得て作成している。

6、資料

本実践のフローチャートを資料として添付する。



※学習用プリント作成の際に利用したサイト

- (1) ぷりんときっず <https://print-kids.net/>
- (2) まめつぶワーク <https://mameppu.com/>
- (3) ちびむすドリル <https://happylic.net/kisetsu-sozai.html>